日本語文法について

中学生になってから勉強する文法、「きらいだ」「にがてだ」「ようわからん」という子どもたちがたくさんいます。同じように、先生たちも文法なんてきらいだと思っている人は多いのではないでしょうか。

ここでいう文法は、「学校文法」と呼ばれているものです。ためしに、インターネットで検索してみてください。かなり多くのサイトがヒットします。そのうちのほとんどが、批判的な立場のものです。日本語文法を研究している学界でも、次のような発言があります。「学校で教わる内容であれば、本来ならば、学界でも正しい認められていることをやさしく解説したものだと思ってしまうのですが、国文法については、不思議なことに学者の大多数がおかしいと感じていることが、堂々と教えられているわけです。」

ふつう、学校で教えられることは、数学でも社会でも理科でも、その専門分野の世界において、おおかたが認めている内容を扱うようになっているはずです。ところが、日本語文法は、「学者の大多数がおかしいと感じている」ことを教えているのです。まるで、社会科における歴史の問題のようなもので、一部の力によって、本当とは言えないことが教えられているのです。

その結果、多くの文法嫌いをうむということになっています。ただ、残念ながら、文法学者の世界でも、学説はいろいろあって、学校文法はおかしい、ということでは一致していても、大多数の学者が一致して支持する文法理論はないようです。そのために、文法理論の相違は棚上げにして、学校で教えるべき「教育文法」をつくろう、という動きもあるようです。

いずれにしても、はっきりしているのは、「学校文法」はおかしいということです。たとえば、「きのう、友だちがうちに来た。」という文を分析する場合、「学校文法」では、「きのう／ともだち／が／うち／に／来／た。」というように区切って分析するようになっています。これでは、その個々の部分を暗記することに精一杯で、この文が何をあらわすのかということに結びつきにくくなります。そのため、多くの子どもたちは（大人も）文法嫌いになるのでしょう。それに、これでは、読む時や書く時に役に立つとは思えませんから、よけいに文法から遠ざかり、日本語文法は、一部の文法好きの人のものにならざるをえないのです。

しかし、今、「日本語ブーム」が続いています。この文法にも、正面からぶつかってみませんか。知って得する？日本語文法です。

動 詞

の場合を考えてみます。

未然形	書か・ない
連用形	書き・ます
終止形	書く
連体形	書く
仮定形	書け・ば
命令形	書け
（未然形）	書こう

右の表、学生時代に勉強して、「なんじゃこりゃ」と思った先生も多いのではないでしょうか。「かきくけこ」となっていて、おもしろいと感じた方もおられるかもしれません。でも、「五段活用」だのなんだのといわれると、もう、めんどうくさいと思った方も多いでしょう。

「書か」が未然形だと教えたとして、どんないいことがあるのでしょう？「学校文法」に熱心な方には叱られそうですが、どうも、役に立つとは思えません。では、どう考えればいいのでしょう。

文法は現実を表現する

「学校文法」が苦手な理由は、文法が目の前の現実や、自分の心から離れているような感じがするからです。もしも、文法が、現実をあらわしたり、伝える人の心をあらわしたりしているものだとわかれば、感じ方が少しは違ってくるかもしれません。また、子どもたちへ伝えるなかみも豊かになっていくことでしょう。

今回は、そうした中の基本的なことだけを提示してみたいと思います。

動詞の大きな役割は述語になること

単語は、文の中で使われるものです。そして、動詞は、文の中では述語になることが一番の役割です。日本語の場合、述語にさまざまな情報を盛り込んでいます。「読み」の中でも、「文末表現に気をつけて読みましょう」などとよくいわれます。それは、述語の形の中に、伝え手の気持ちや、文であらわされたできごと・ことがらのとらえ方、時間のことなどが含まれているからです。ですから、日本語の動詞は、豊かな「活用」をするのです。

では、その中のいくつかをみてみることにしましょう。

書く ―― 書きます

学校文法では、「書く」は終止形、「書きます」は、連用形にていねいさをあらわす助動詞がついたもの、ということになります。どうして、こんなまわりくどい言い回しをするのでしょう。「書く」は、「ふつうの言い方」、「書きます」は「ていねいな言い方」でいいのです。こうすれば、小学校の低学年でもわかります。これは、「ていねいさ」の対立で、常体・敬体といわれているものです。他のかたちのところでもあてはまります。（後図参照）

ところで、「書きます」をひとつの形としてみれば、これも「終止形」ということになります。「書き・ます」と分けるから、「書き」を未然形と名づけてしまうのですが、こうや

って分けることは、あまり意味がありません。「書きます」は、それでひとまとまりなのです。そうすれば、小学生の子どもたちにも簡単に教えることができます。作文を書いている場合、子どもの中には、「ていねいな言い方」と「ふつうの言い方」を混ぜて書いてしまう子がいます。そんな時に、「『～します』という『ていねいな形』で書きましょう」というふうに説明できます。おそらく、みなさん、日常的にやっているのではないでしょうか。

書く――― 書いた　これは、単純に「現在形」と「過去形」という時間の対立をあらわしているとわかります。では、学校文法では、この過去形をどう習ったでしょうか。もしかしたら、習っていないかもしれません。まじめに勉強してきた人は、「書き」という連用形が音便化して「書い」になり、それに過去・完了をあらわす「た」がついたもの、と答えることができるかもしれません。しかし、小学生にはとうてい理解できませんし、中学生でもむずかしいでしょう。でも、子どもたちは、「書いた」というのは「過ぎたこと」だと知っています。たしかに、音便というむずかしい側面をもっていますが、日本人のほとんどは、そのようなことを意識していません。大切なのは、「～した」が過去をあらわすということです。これなら、小学１年生でもわかります。また、これが「ていねいな言い方」で使われると、「書きました」になる、ということも簡単にわかります。

これが、作文では大切なことです。くらしに目を向けて書く生活作文では、その題材は過去のできごとです。ですから、その書き方の基本は、「過去形」になります。作文の指導では、まず、「～しました。～しました。」と書きましょう、と指導します。それは、できごとを順序よく思いだすためなのです。これを「展開的過去形表現」と呼んだりします。

ところで、もう一つの「書く」は、どうでしょう。一般的に、「書く」は「現在形」といわれますが、「子どもが作文を書く」というのは、現在のことをあらわしていません。むしろ、「明日、作文を書く」というように使います。つまり、「書く」というのは「未来形」なのです。その上で、「机の上に本がある」のような「現在形」があります。「書く」は「現在・未来形」「非過去形」というべきものなのです。

書く――― 書かない　これも、「肯定」と「否定」だとわかります。みとめかたのちがいです。未然形に「ない」がついたもの、などと教える人はいないでしょう。そして、「ていねいな言い方」では、「書きません」というし、「過去形」では「書かなかった」といいます。とりたてて目新しいことではありません。

書く―――書くだろう　これは、学校文法で分析すると、連体形に・・・と、なかなかむずかしそうです。しかし、子どもたちには、むずかしいことではありません。「・・・あしたまでには、なんとかかわくだろ。」（わらぐつの中の神様）

というのを読んだ時、お母さんが「かわく」と予想している、想像している、というように発表するでしょう。また、ここから、お母さんがあまり本気で考えていないということもわかるかもしれません。

このように、「書くだろう」というのは、おしはかり・推量をあらわします。

書く――― 書こう　「書こ」は、未然形です。といわれても困ります。「書こう」を「書こ」と「う」に分けることに、どれほどの意味があるでしょう。これもまた、子どもたちには、簡単にわかることです。「しよう」というのは、いっしょにするように、誘いかけています。つまり、さそいかけ・勧誘をあらわします。また、ここまでの形と違って、ただ相手に伝えるだけでなく、相手にはたらきかけることをあらわしています。

書く――― 書け　これも、命令という形で相手にはたらきかけをしていることをあらわしています。勧誘と違って、自分もいっしょにするわけではありません。それが命令です。それだけに、かなりきつい言い方になります。物語の中に出てきた場合、その文脈上において、重要な読みの手がかりとなるでしょう。

「書く」に対立する基本的な形を紹介してきました。が、これらは、整然と関係しあっていて、下のような表にまとめることができます。たとえば、「書かなかった」は、きもちとしては「いいきり（断定）」で、発話時からすれば「過去」のこと、「書いた」のうちけしで、「ふつうのいいかた」で表現している、ということになります。これは、小学校の中学年でもわかる内容です。なぜなら、現実に即しているからです。

		ふつうのいいかた		ていねいないいかた	
きもち	とき	みとめ	うちけし	みとめ	うちけし
いいきり	現在・未来	書く	書かない	書きます	書きません
	過去	書いた	書かなかった	書きました	書きませんでした
おしはかり	現在・未来	書くだろう	書かないだろう	書くでしょう	書かないでしょう
	過去	書いただろう	書かなかっただろう	書いたでしょう	書かなかったでしょう
さそいかけ		書こう	(書くまい)	書きましょう	(書きますまい)
命令		書け	書くな	書きなさい	(書きなさんな)

この表は、さらに豊かな広がりをもちます。